

2017

第4回 日韓国際学術会議・龍谷大学所蔵安重根遺墨等関係資料展示

東アジア地域の平和を

見つめなおすための歴史認識

《プログラム》

◆11月18日（土）

＜特別閲覧＞ 12:00～15:30 22号館 107 教室
龍谷大学図書館主催「安重根遺墨『獨立』等関係資料展示（レプリカ）
挨拶：寺山壽範住職（明正寺）

＜国際学術会議＞ 13:00～18:30 22号館 101 教室

第Ⅰ部：特別講演

13:15～ 李英玉（安重根義士紀念館館長）
「安重根—アジア初の地域共同体という構想」

第Ⅱ部：東アジアの歴史をめぐる越境的対話—記念講演と学術シンポジウム—

13:45～ 記念講演 内海愛子（恵泉女学園大学名誉教授）
「サンフランシスコ平和条約—植民地支配・戦争裁判・賠償から考える」

15:00～ 学術シンポジウム

発表者：

李娜榮（中央大学教授）「フェミニストの観点から見た日本軍性奴隷制問題解決運動」

都珍淳（昌原大学教授）

「安重根と日本の平和運動：幸徳秋水・徳富蘆花・石川啄木の関係を中心に」

新田光子（龍谷大学） 「植民地と神社神道」

討論者

金昌祿（慶北大学教授）

山下明子（（公財）世界人権問題研究センター嘱託研究員）

重本直利（龍谷大学教授）

崔柄憲（ソウル大学名誉教授）

コーディネーター 平田厚志（龍谷大学名誉教授）

◆11月19日（日） 11:00～17:30 21号館 604 教室

第Ⅲ部：東アジアの歴史をめぐる越境的対話—映画上映とトーク—

「映画『沈黙 立ち上がる慰安婦』から考える『慰安婦』問題のいま」

10:30～開場

11:00～映画「鬼郷」上映

13:00～休憩

14:00～映画「沈黙 立ち上がる慰安婦」上映

15:50～朴壽南監督によるトークおよびコメンテーターの発言

17:30 終了

※同会場にて「未来のための歴史パネル展」を開催します。

11月18日（土）～19日（日）

会場：龍谷大学深草キャンパス（京都市伏見区）

18日：22号館 101 教室 遺墨展示 22号館 107 教室

19日：21号館 604 教室

参加資料代 1,000 円（2日間共通）・学生無料



主催 龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター

安重根義士紀念館（韓国・ソウル）／ 特定非営利活動法人 コリア NGO センター

（連絡先）龍谷大学経営学部 重本研究室 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67

Tel 075-645-8630 or 8519

Email sigemoto@biz.ryukoku.ac.jp

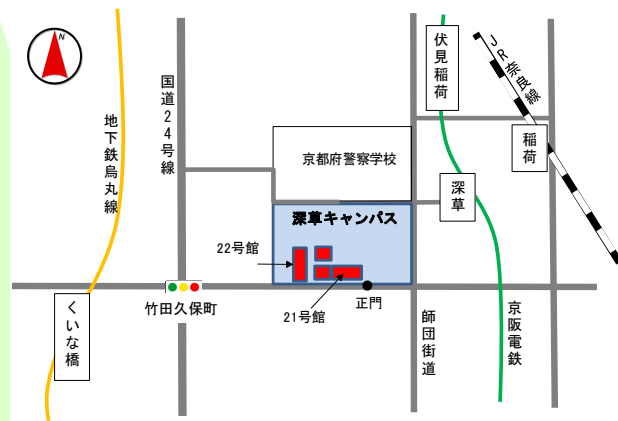
安重根東洋平和研究センターは、東アジアの平和と安定の実現に向けて、戦後補償問題や歴史認識から生じる諸問題の解決の糸口を模索するため、市民活動と関連した研究活動を展開することを目的とし、2013年5月に龍谷大学社会科学研究所に設置されました。韓国・ソウルの安重根義士記念館と共催の国際学術会議は、今年で四回目を数えます。センター名は、安重根の未完の遺稿である「東洋平和論」に由来し、その歴史的・現代的考察の重要性を社会に訴えるものです。本年3月には、本センターの研究成果として『安重根と東洋平和—東アジアの歴史をめぐる越境的対話—』（明石書店）を刊行いたしました。

龍谷大学図書館には、処刑される前に獄中の安重根が書いた遺墨四幅が所蔵されています。これらは、旅順監獄の教諭師や看守として安重根と接し、交流を深めた日本人が安重根から直接譲り受けたものであり、その後、龍谷大学に寄託されたものです。今回、これらの遺墨のレプリカを、その他の関連資料とともに展示します。当時、安重根と日本人との間に生まれた信頼と友情を示すこれらの遺墨は、日韓関係のあり方がどうあるべきかを私たちに問いかけているようです。この機会にぜひご覧ください。

また今回は韓国 NGO センターと共催して、朴壽南（パク・スナム）監督の「慰安婦」問題をテーマにしたドキュメンタリー映画の上映も企画しました。この機会が、日韓関係において今なお大きなテーマであり続けるこの問題についても、改めて考え、解決に向かう一助になることを願っています。

龍谷大学社会科学研究所附属 安重根東洋平和研究センター

<会場アクセス>



龍谷大学深草キャンパスへは

- ・京阪電車「深草」駅より西へスグ
- ・京都市営地下鉄「くいな橋」駅より東へ徒歩約 10 分
- ・JR・近鉄京都駅（八条口）からは車で約 10 分

【特別講演】李英玉(イ・ヨンオク) (安重根義士記念館館長 成均館大学英文学科名誉教授)

「安重根—アジア初の地域共同体という構想」

〔講演概要〕 安重根の思想を一言で表現するなら、「平和」である。彼は、人類は平等で、それぞれの状況で平和に生きることが人権であるという平和思想を提唱した。彼は軍人としても平和を実践し、義兵活動中に捕虜にした数人の日本軍兵士たちを万国公法によって解放したというエピソードがある。また、獄中生活でも平和思想の伝播に専念し、安の実像を理解した日本人看守たちは、彼を深く尊敬し慕うようになった。彼は平和を維持するための方法論を「東洋平和論」で示し、東アジアの平和の重要性を訴えた。安重根は、人生でも、行動でも、哲学でも、著述を通じて、ひたすら平和を具現した人物だということがわかる。

<主な著書> 『ジェンダーと歴史：少数人種文学の理解』、『N. ホーソンと R.P. ウォーレン』、『米国の小説と共同体意識：ロバート・ベン・ウォーレン、トニ・モリスン、チャンレリー』



【記念講演】内海愛子(うちみ あいこ) (恵泉女学園大学名誉教授)

「サンフランシスコ平和条約 — 植民地支配・戦争裁判・賠償から考える」

〔講演概要〕 なぜ、講和会議から韓国が排除されたのか（フィリピンやインドネシアは参加）。なぜ、朝鮮人が戦犯＝戦争犯罪人になったのか（戦犯は 148 人、23 人が死刑）。植民地支配を裁かなかった米英蘭豪など連合国の戦争裁判は、朝鮮人を「日本人」として裁いた。日本は「サ条約」で独立すると、すぐに戦犯は「国内法上の犯罪人ではない」と通達を出し、援護法や恩給の対象にしていく。その一方、朝鮮人傷痕軍人・軍属や戦犯たちは、「外国人」だからと対象からはずした。「日本人」として刑死し、「外国人」だからと援護から外された朝鮮人戦犯たち。かれらの訴えを通して、植民地責任の問題を考える。

<主な著書> 『朝鮮人 BC 級戦犯の記録』（勁草書房 1982 年；2015 年に岩波現代文庫）、『戦後補償から考える日本とアジア』（山川出版社 2002 年）、『戦後責任 アジアのまなざしに込めて』（共著 岩波書店 2015 年）



11月19日（日）11時より 21号館 604教室

第Ⅲ部 東アジアの歴史をめぐる越境的対話—映画上映とトーク—

映画『沈黙 立ち上がる慰安婦』から考える 「慰安婦」問題のいま



ハルモニたちは半世紀の沈黙を破って、立ち上がった

一私たちは 15、16、17 歳の花のような年頃に、日本軍によって強制的に連行され、数年にわたり将兵らの恐るべき性暴力に蹂躪された被害者たちです。私たちは日本政府が要求に応えない限り、生きて国には帰りません

今年 90 歳になる李玉先（イ・オクソン）さんは、韓国・俗離山の村に一人で暮らし毎朝お寺に通う仏教徒だ。17 歳で北満州の慰安所に監禁された李さんは、戦後 50 年を経てその沈黙を破り立ち上がった。1994 年、14 人の仲間と共に日本政府に謝罪と個人補償を求めて来日。「法的責任は解決済み」とする日本政府に対し、被害者だけが集まり直接交渉を開始した。ハルモニたちは 3 年にわたり再三来日し、日本軍の犯罪を証言し名誉と尊厳の回復を訴えた。その闘いに在日朝鮮人 2 世の女性監督が寄り添い、彼女たちの恨（ハン）を映像に記録した。

あれから 20 余年、闘いの主人公の多くが亡くなった今、2015 年日韓両政府が合意した「解決」は果たして当事者の問いに答えているのだろうか。90 年代当事者たちの苦闘を共にした監督朴壽南が密着記録と李さんの人生をつむぎ、生き証人たちの沈黙を未来に伝える。

監督：朴 壽南（パク・スナム）

1935 年三重県生まれ。在日朝鮮人 2 世の作家として民族差別問題に取りくむ。『もうひとつのヒロシマ—アリランのうた』（1986 年）で朝鮮人被爆者の実態を映像化し、沖縄戦に連行された朝鮮人軍属と「慰安婦」の証言を掘り起した『アリランのうた—オキナワからの証言』（1991 年）では約 20 万名を動員。日本の植民地支配による朝鮮人犠牲者の沈黙に光をあて続ける。『ぬちがふっ（命果報）—玉砕場からの証言—』（2012 年）では沖縄戦の「玉砕」の真実に迫った。第 19 回 KBS 海外同胞賞受賞。



◎同時上映 『鬼郷』（韓国公開 2016 年 チョ・ジョンレ監督作品）